

掛川お茶大使 & 日本茶インストラクター

吉岡亜衣加の お茶の間通信



祝！産地賞 掛川茶に携わるJA茶業課の 中村貴司課長にインタビューしました(後半)

今回は前回に引き続き、JA掛川市茶業課の中村貴司さんへのインタビューをお伝えしたいと思います。

吉岡 後半もよろしくお願いいたします。早速ですが、第76回全国茶品評会にて掛川市は、深蒸し煎茶の部において産地賞を受賞しましたね。

中村 これまでも産地賞を何度も受賞してきたのですが、受賞を逃したこともありまして。生産者の皆さんと「僕ももう一度勉強し直して奪還したい、皆さんの力が必要です」と話し、そこから学び直して手応えのあるお茶を出品することができるようになったりと、苦い経験も糧になっています。農林水産大臣賞を受賞した山東茶業組合さんは、出品茶作り



を指揮する工場長を長く務める山本康博さんの名前で本命茶を出し、日頃の感謝の気持ちで山本さんを登壇させたいという思いで挑戦だ、節目となる20周年を迎えた組合もあつたりと、様々なドラマのある品評会でした。

吉岡 それぞれの思いが詰まった出品だったんですね。受賞が決まった時の農家さんや茶業課の皆さんの様子はいかがでしたか？

中村 結果発表の日は、組合の皆さんも茶業課も掛川市役所の人たちもみんなソワソワしていて、受験発表の日みたいですね。そして受賞された組合には取材の準備などもあるので電話ですまお伝えするのですが、その後は工場へ駆けつけ、喜びを分かち合います。

吉岡 受賞が決まるとうれしい1日ですね。

中村 結果が出るまでは茶業課の職員みんなドキドキですが、掛川市からの出品茶の多くが上位入賞していることがわかると、良かったと安心します。獲って当たり前というプレッシャーもあります。

吉岡 獲って当たり前とはすごい領域ですよね。このように産地賞を通算24回も受賞という素晴らしい結果が出ているのはなぜだと思いますか？

中村 生育したお茶が良いのはもちろん、手摘みというの大きいと思います。後継者不足もあり摘み手が少ない中でも、形や長さ枚数など芽を揃えて摘むという確かな技術と経験、丁寧な作業をふれずに行つ、やるならトップを獲るという意気込みと志を持つ生産者の力がこの結果を出していると思います。

吉岡 間雲に摘めばいいというわけではなく

芽を見極めながらの作業は、大変な時間と労力ですね。今後の掛川茶の展開を教えてくださいませ。

中村 生産者の皆さんも良いお茶を追い求めていますし高みを目指してくださっているのでも品評会などもまだまだ記録を塗り替えていくだろうと思います。全国でおいしいお茶作りを求めて産地を盛り上げていただき、その中でもやっぱり掛川のお茶はすごいと思っています。ただ、これからは掛川茶に期待できますね。それでは最後にお茶の間通信をご覧の皆さんにメッセージをお願いします。

中村 若い世代の皆さんや、まだお茶にあまり触れていない方にこれからお茶の魅力を気付いていただき楽しんでもらえたら嬉しいです。消費を考えれば海外に目を向けるのですが、掛川市は「お茶のまち」といわれている以上、どれだけ市民に愛されているのかというのが大事だと考えます。あぐり、お茶の間通信をきっかけのひとつとしてお子さんにもお茶や農業に興味を持ってもらい、将来に役立てていただけたらと思います。

吉岡 貴重なお話をたくさんありがとうございました。

中村 ありがとうございます。

